



Title	『ドリアン・グレイの肖像』論：ワイルドのゆれ動く自己
Author(s)	玉井, 暲
Citation	Osaka Literary Review. 1971, 10, p. 105-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25719
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ドリアン・グレイの肖像』論

—— ワイルドのゆれ動く自己 ——

玉井 暉

世紀末文学がロマン主義文学の延長線上に位置付けされている事は言うまでもない。そしてその代表者がオスカー・ワイルドである事に誰も異論はないであろう。ロマン主義文学者の描く世界は、一般的に、あるがままの現実の描写にとどまらず、多分に自己本位的である。過去・現在・未来のいずれを描いても、現在に満たされぬ自我が前面に出てしまって、頭の中で創り上げた「かくありたい」世界を描きがちである。ワイルドもこの例にもれる作家ではない。『嘘の衰退』の中で、「方法としてリアリズムは完全な失敗である」¹と2度まで口にし、又『芸術家としての批評家』の中において、「凡てすばらしい想像的な仕事は自意識的で計算づくである」、芸術作品は「最も自意識的は努力の結果」²に他ならない、と言うのは、作品中に人工の世界を創り上げる事を意味している。そして故意に新しい世界を創造する以上、自分の理想・憧憬の描写へと進みがちなのは当然である。この事を考慮しながら、今ワイルドの唯一の長篇小説『ドリアン・グレイの肖像』を検討・鑑賞して行きたい。

この小説が始めて読者の目に触れたのは、リピンコッツ・マンズリー・マガジン紙上、1890年6月20日の事である。今の我々にとって想像出来ない事だが、この作は当時の読者層の間に大きな反響をひきおこした。とは言っても、この作が感動の書物であるとか大傑作であるとか言った種類の評判では決してなくて、大部分は芸術性を問わずに、この作を不道德な本とか「有害な本」³として告発する非難の声であった。その理由と言うのは、主人公として、可憐な女優を死に追いやり、つき合う友人達を破滅の道に

誘い込み、親しい画家を殺害し、場末の酒場やアヘン窟におしのび姿で出入りする、にもかかわらず何の社会的追放も受けず、青年の若さを保ちつづける有閑プレイボーイが描かれているからであり、副主人公として、快楽主義哲学を唱導し、たえず刺激的な逆説を弄する人物が描かれているからであり、さらに画家を副主人公に加えて、3者の間に同性愛的な臭いがかぎとれるからであった。例えば、セント・ジェイムズ・ガセット紙はこう批判する。 “Not being curious in ordure, and not wishing to offend the nostrils of decent persons, we do not propose to analyse *The Picture of Dorian Gray*: that would be to advertise the developments of an esoteric prurience.”⁴ 又ワイルドのこの小説を書いた理由にふれて、“Perhaps it was to shock his readers, in order that they might cry Fie!”⁵ と述べている。スコッツ・オブザーヴァー紙も同様に反道徳性を非難的にあげる。“it is false to human nature — for its hero is a devil; it is false to morality — for it is not made sufficiently clear that the writer does not prefer a course of unnatural iniquity to a life of cleanliness, health, and sanity.”⁶ ワイルドは、2ヶ月足らずの間に216篇⁷にも達したこのような批判文に対して、わずか3篇だけをとりあげて反論の筆をとった。彼は、「芸術作品が道徳の視点から批評され得る」⁸と言う事は理解出来ないと述べ、「芸術家とサブジェクト・マターとを混同」⁹していると憤り、「芸術の領域と倫理の領域は全くわかれており、別物である」¹⁰と言って芸術の自律性を声高に主張している。このいわゆる芸術至上主義の立場は、この小説と同年、以前に発表していたエッセイを収録して出版された『意向集』 *Intentions* の中に見られる中心思想であって、両者の間の主張は一貫している。

ところで、これら反論の手紙の中で我々が意外な感じを受けるのは、ワイルド自からこの小説のモラルについて説明している事である。この小説が‘wicked’で‘immoral’であるとの批判に答えて、彼はこれにはモラ

ルがあると主張する。 “All excess, as well as all renunciation, brings its own punishment. . . . Yes; there is a terrible moral in *Dorian Gray* — a moral which the prurient will not be able to find in it, but which will be revealed to all whose minds are healthy.”¹¹ さらに、ドリアンは、たえず「自分の楽しみをぶちこわし、若さと快樂はこの世の凡てではないと警告を発する過度の良心意識に悩まされている」¹² のであって、決して冷たい、良心の持たぬ人物ではないと、主人公の道徳性を弁護している。即ち、この小説は決して immoral ではなくて、moral な物語であると反論している事になる。すると、彼が先に現実のモラルが芸術の世界に侵入するのを排斥し、又「芸術家と言うものは全く倫理的に共感する事はない。徳も邪悪も芸術家との関係は丁度パレットの上の絵具と画家との関係と同じである」¹³ と述べているものだから、彼は本当にこの小説の倫理性を主張しているのかと疑いたくなる。それとも、この物語の内容に対する非難攻撃の末、追いこまれてやむを得ず自作に倫理的な解釈をこじつけたのであろうか。確かに、ワイルド自からモラルの指摘をしなくとも、倫理性を読みとれない事もない。限りない放蕩のあげく、ドリアンは良心の呵責に耐え切れずに遂に友人を殺害したのと同じナイフで自分の胸を刺して自殺せねばならなかったからである。とは言うものの、悪をなしたる者必らず滅ぶと言う、いわば勸善懲惡小説を作者は目指したのだろうか。何にもまして芸術の優位、人生の芸術化などを説き、当時のえせ道徳主義に攻撃の矢を放ったワイルドであるから、この作品を教訓小説として、又結末の主人公の死を単に良心の呵責による自殺としてではかたづけられないだろう。

ドリアンはナイフで自分の肖像を突き刺した。ところが実際には自分の胸を刺して倒れていた。他者と思っていた肖像画は実は自己であったのであり、自分の soul が宿っている心臓であった。ドリアンが、肖像画が自

分の soul をあらわしている事、即ち、顔は以前のままの美貌を保っているにもかかわらず、肖像画は犯した罪によって醜くく変化する事を知るのは、シヅルを死に追いやった後である。作者はこの時の模様をこうコメントしている。「この絵がいままで彼自身の body を彼に示して来たように、これからそれは彼自身の soul を示すだろう」(第8章)と。この事件を契機として、ドリアンと画像との開きは快楽にふけるに従って著じるしくなるばかりである。soul は醜くく変るのに body は全く若々しくとどまっている。これは完全に彼の soul と body の間に分離が起っている事を示している。

ドリアンの肖像画がバジル・ホールウォードのアトリエで描かれた時点においては、body と soul は完全に統合された状態にあったはずである。バジルはそれら二つのものが統合・調和されている中に彼の理想を見出し、その結果傑作を産む事が出来た。ドリアンをモデルとして得た喜びをこのように述べている。「『思想の昼間に見る様式の夢』—誰か言ったのか、忘れてしまった。しかしドリアンは私にとってまさしくそれなのだ。…… 無意識に彼は私の為に新流派のとり方針をきめてくれる。…… soul と body の調和—それは大変な事なのだ。我々は狂気のあまりその2つを引きさいて、野卑なりアリズムと空虚な理想をつくってしまったのだ。ハリー、ドリアンが私にとってどんな存在であるか、わかってくれたらなあ！」(第1章) 又後になってバジルはドリアンにこう告白している。「我々芸術家にはきわめて美しい夢のように目に見えない理想の記憶が訪れて来るものだが、君は私にとってその理想の権化となった。」(第9章) この調和のとれたドリアンを soul と body に分裂させたのはヘンリーのヘドニズムであると言える。感覚による以外に何も soul をいやす事は出来ないとのヘンリーの説を受け入れて、新しい感覚を求め続けた結果彼の soul のみが老いる事となったのである。

この調和のとれたドリアンをモデルにして、バジルが肖像画を完成した

時、新しい一個の芸術品の誕生であった。アトリエには2個の芸術品が立っている事になる。一方はその肖像画、静的な (static) な芸術品と言ってよい。他方は美貌のドリアン自身、生ける、動的な (dynamic) 芸術品と言ってよいだろう。この2個の芸術品におのおの支配力をふるうのは全く対照的な2人の人物、バジルとヘンリーである。バジルはともすれば若者に説教をしがちな、又破滅に瀕したドリアンに神への祈りを勧める (第13章) ような道徳的な性質の画家である。ヘンリーの方は、快樂主義を持論とし、恋人の死により良心に苦しむドリアンを、バジルとは異なって、劇場に誘うような、いわば反道徳的・悪魔主義的人物と言ってよい。この2人に会うまでのドリアンは、自分の美と若さ (芸術的価値) に目覚めぬ、単なる素材にすぎなかった。バジルは、「この絵の中に私自身の soul の秘密をあらわしてしまった」 (第1章)、又「私はその中にあまりに多くの自分を注ぎ込みすぎた」 (第9章) と告白しているように、自分の soul を注入する事によって、素材としてのドリアンからこの静的な芸術品を創りあげた。それ故、画像は、この道徳的な画家の心を反映して、ドリアンが罪を犯すたびに醜くなって行く。他方快樂主義的生活者ヘンリーは、「今朝って！ 君はその時から生き始めたのではないか」 (第2章) とドリアンに向けて言っているように、肖像画と言う鏡を見せる事によって、若さと美の貴さを説き、目覚めさせて、生ける芸術品を産み出したのである。この新しいヘドニスト生誕の瞬間はドリアン自身の口から知らされる。「もしそれが入れ替わっていたらよいのに。常に若くあるのが僕で、絵の方が年とってくれたらなあ。その為には、その為には僕は何だって与える。……その為には、僕の soul だってくれてやる。」 (第2章) ヘンリーは、輝くドリアンを彼の手によってさらに一層理想的な人物に仕立てようとひそかに決心をする。「この若者をともかく驚歎に値する型に造りあげる事が出来る。……彼に対して出来ない事は何もない。タイタンにも玩具にも造る事出来る。……彼を支配してやろう、いや、もう半分してしまっ

ているのだ。」(第3章) ドリアンは、現実の生活においていわばヘンリー哲学の実践者として放蕩の限りを尽すが、若さと美は衰えず、人々を魅了しつづける。バジルもヘンリーもドリアンよりそれぞれ芸術品を創り出す事に成功し、常に自分の理想状態にあると信じている。それだからこそ、バジルは再びモデルになる事を申し込む(第9章)のであり、ヘンリーにしても、既に青年期を過ぎたはずなのに若さの衰えぬドリアンに羨望の気持を漏らすのである(第19章)。ところが実際のドリアンは完全に創造主の手許から離れてしまっている。かつての、soul と body の調和したドリアンではなくなっていて、快樂を味わって body の若さだけは保っているものの、soul はいやされるどころか、その象徴である画像は醜悪になるばかりであり、soul と body の分化は進む一方である。ただドリアンのみがこの事実を知っている。即ち、彼の美貌は実体としての墮落した soul を隠す仮面(mask)なのであって、彼は今、実体から遊離した虚構の世界に住んでいるのである。

ドリアンは、このいわば二重生活、soul と body の分裂状態での生活に悩まされないわけではない。soul の秘密が他人に見られるのを恐れて、肖像画を二階の密室にとじこめたのもこの理由による。それでも「扉にしっかりと入念に何本かのかんぬきをかけて来たにもかかわらず、彼の留守中に誰か部屋に入り込むかもしれない」(第11章)と言う懸念にかられて、彼は長い間英国を離れるのに耐えられない程であった。ジェイムズからの恐怖が彼の不慮の事故死によって去った後、ドリアンはその2者間の差をなくそうとする。ここで彼が試みるのは、美貌と言う仮面を脱ぎ捨てて醜悪な実体に忠実になろうとする試みではなく、彼の心は、墮落した soul の絵からいかにしてこの醜くさを取り除くかと言う問題にとらわれている。ここでドリアンは善行による除去を試みる。かって冷たくあしらって死に追いやったところのシヴィル、この娘を彷彿とさせる無垢な田舎娘ヘッティの心を誘惑しまい、傷つけまいとして彼は身をひくのである。「ヘッテ

ー・マートンの事を考えると、錠かけた部屋の中の肖像画が変化したのかどうか彼は気になって来た。きっと以前ほどひどくはないだろう。もし僕の生活がきれいなものになれば、あの画像の顔から邪悪な情熱の印を凡て取り除けるだろう。たぶん邪悪の印は既になくなっていくだろう。」(第20章) つまりドリアンは、画像の不快な醜悪さを消し去って、人生において最後まで美しさを保つ生ける芸術品として残ろうと努めているのである。

さて、この小説の登場人物は ‘have no counterpart in life’ であって ‘mere catchpenny revelations of the non-existent’¹⁴ であると批判された時、ワイルドは次のように反論した。“The function of the artist is to invent, not to chronicle. . . . Life by its realism is always spoiling the subject-matter of art. The supreme pleasure in literature is to realise the non-existent.”¹⁵ このようにワイルドは意識的に「新しく創り出し」、「存在せぬものを顕現」した結果が小説の世界であると考えている。先述した通り、虚構の世界をわざわざ造りあげる以上、ワイルドが「かくありたい」世界の描写、憧憬とする人物の設置へと進む事は当然考えられるが、では彼の憧憬はどこにあるのか。ボードレールの『赤裸の心』の中に次のような部分がある。

どんな人間にも、どんな時にも、二つの祈願が同時にあって、一つは神に向かい、一つはサタンに向かう。神への祈願、あるいは精神性は向上への希求である。サタンへの祈願、あるいは動物性は、下降の悦びである。¹⁶

このことばは人間の普遍性についており、善と悪、神性と獣性、聖女と娼婦と言うように、人の心の中には互に相対立する2傾向が共存しているとはよく言われる事である。今『ドリアン・グレイ』を書く時のワイルドの心は、サタンへの祈願、下降の悦びへと向っているとは言えないだろうか。彼のこの獣性への強い興味は、この小説中では、「罪は現代生活の中の唯

一の色彩要素である」(第2章)と述べるヘンリーのことはからもうかがわれるように、感覚主義を中心にして、果ては sin, crime への傾倒をも辞さない程にまで至っている。もちろんこの事はヴィクトリアニズムへの反逆と言う事と密接に結びついているけれども、ただ単に反逆の為の有効な手段と言う事だけに終わっているものではないだろう。この傾向は彼のどの著作にも現われているけれども、特に、毒薬を手に入れて次々親類縁者を殺していった、画家、美術評論家、文人、そしてダンディでもあったトマス・グリフィス・ウエインライト (1794—1852) についてのエッセイ『ペン、鉛筆そして毒薬』の中では顕著である。 “we must not forget that the cultivated young man . . . was also . . . one of the most subtle and secret poisoners of this or any age. How he first became fascinated by this strange sin he does not tell us,¹⁷” とか “His crimes seem to have had an important effect upon his art. They gave a strong personality to his style,¹⁸” 又 “There is no essential incongruity between crime and culture.¹⁹” とか、これらの引用文はその良い例である。そして、このような人物に強く心引かれて、このようなエッセイを書いた事自体、彼の獣性への関心の強さを示す何よりの証拠である。さらに現実の人生においても、彼がサタンに向かって歩んで行った事は、『獄中記』の中のことは、「永遠の若さを浪費することが私に奇妙な喜びを与えた。高みにあきて来ると新しい感覚を求めてわざと深みにまで降りて行った²⁰」がよく示す通りである。このような快楽、反道徳性、悪への強い傾倒は、それらが彼の憧憬とするものであるからであった。Nethercot の言葉を借りればこの時のワイルドは ‘the Devil’s Advocate’²¹ と言う事になるが、まさしくこの気持を表現したのが『ドリアン・グレイ』の世界ではなかったのか。当時多くの読者はこの小説の反道徳性を非難し、それに対して彼はモラルのある事を説明して反論したけれども、それは攻撃を一応避ける上での単なる口実・弁解のように思われる。彼の目指した

のは、そしてそもそもこの小説を書いたのは、まさしくこの反道徳性を描きたかった事にあると思われる。画像を前にして、ドリアンが若さと引き換えに soul を悪魔に売る場面に言及して、Juan は “The novel is a fulfillment of this wish.”²² と言っているように、ワイルドはドリアンの願い（ひいてはヘンリーの願い）をかなえさせる為に小説を書いたようなものだ。ジイドに向って、小説なんて書けないだろうと人に言われたものだから数日で書き上げたと言っているように、筆の滞りが無ければ自分の好きな事を勝手に書きまくる事に、苦痛の伴う事はない。「私はこの本を全く私自身の楽しみの為に書いた。そしてそれを書く事は私に大きな楽しさを与えた」²⁴と述べるワイルドは、この辺の心的背景を物語っている。ワイルドのサタンへの希求を満足さしてくれるのは、師ヘンリーの説くヘドニズムの実践者、ドリアンなのだ。1894年、ある手紙の中で、“Dorian [is] what I would like to be.”²⁵と書いた理由の一つはここに見つけられる。

ワイルドのその手紙のことは、他の一面を持っている。今ドリアンは、実体としての soul（画像）とは袂を分けて美と若さの仮面を付けて生活している。この虚構の中での生活を脅やかすのは醜悪にと変化した画像であるが、自分以外誰も知らない。ドリアンは、齢と共に老い醜くなる人々とは異なり、永遠に生ける芸術品として世に君臨している。このドリアンの人生を羨望もってながめているのはヘンリーである。なるほどヘンリーは快樂哲学を持論とし、至るところで唱導はしているものの、現実においてはドリアンほどに実践出来ないでいる。バジルが「道徳的な事は全然口にしない、けれども悪事を犯すこともない。君のシニジズムは単にポーズにすぎない」（第1章）と言っているのは、多分にヘンリーが理論家だけにとどまっている事を言い当てている。ヘンリーはドリアンのおくって来た人生についてこう言う。「人生こそ君の芸術であった」（第19章）と。これは、ドリアンが老いて行く普通の人間より、永遠に美と若さを保つい

わば人工の人間に変身して、望むところ勝手に活動しようとも、耐えず人々の心をひきつけて来た事をさしている。かつてワイルドは『ペン、鉛筆そして毒薬』の中で、ウェインライトに関して、“This young dandy sought to be somebody, rather than to do something. He recognised that Life itself is an art,”²⁶と言った。ところがこの小説中では、ドリアンは確かに「誰かになって」しまっているのである。ワイルドが人生の芸術化と言う時、人々は彼の審美服装、胸のひまわり、青磁のつぼ等々を想像しがちであるが、その問題はそのような表面的なところだけにあるとは思われない。ドリアンが現実の人間から人工の人間に変わって、マスクを付けた虚構の世界に住んだ事、これが芸術化された人生と言ってよいだろう。人生の芸術化とは一種の変身の思想である。芸術家が何人かの登場人物を創り出すように、人生において人がある型の人を、それも自分の理想とする型の人を案出し、それに身をかえて、虚構の世界に入りこむ事である。「人生における最初の義務は出来るだけ人工的 (artificial) になる事である」²⁷と述べるエピグラムは、彼のこの思想を適切に要約している。ドリアンがワイルドの理論通り、肖像画の中の自分に変身する事によって芸術的人生をおくって来たのであるから、「ドリアンは私になってみたいと思うところのものである」²⁸と、手紙に書き記す理由は明らかである。『獄中記』の中で、“I treated Art as the supreme reality, and life as a mere mode of fiction.”²⁹と自分のおくって来た人生をふりかえり、“People point to Reading Gaol, and say ‘There is where the artistic life leads a man’.”³⁰と述べるワイルドは、自からも快樂主義的ダンディに変身して「芸術的人生」をおくって来た事を認めているのである。

このように主人公ドリアン・グレイは、反道徳性と芸術的人生の故にワイルドの理想とあこがれる人物である。それ故、この小説が攻撃された時、

彼のこれは一つのモラルを持っているとの発言は、本心から出たものであるかどうか疑わしい、と先に述べた。ところでこの「疑わしい」点にこの小説は一つの問題を持っている。もしかすると、ワイルドの証言通りモラルを持っているかもしれない。ドリアンは soul と body の間をひき裂かれ、良心に見捨てられている事に悩む。それは、ワイルドの童話『漁夫と彼の soul』の中の漁夫に似ている。一時の感能的快樂の為に soul をたち切った漁夫は、すぐその快樂にもあきて、次々と数多くの悪行を、それも自己を抑制する soul を持っていないのであるから、凡て無意識のうちに犯して重ねてしまう。最後は主人公の死をもって soul は漁夫の肉体と合体する。この2者の分裂の恐ろしさの教訓的な描写と主人公の死は、ドリアンの一生に似ていると言えるだろう。それにドリアンの soul は道徳的なバジルによってたえず支配されている。これらこの小説の倫理的な面は、姉シザイルと姉の身の上を心配しながら外国船に乗り込む弟ジェームとの間のほのほのとした愛情の描写（第5章）とも結びついている。こう考えて来るとワイルドの証言はますます信頼性を持ってくるわけだが、これはどう言う事なのか。ボードレールがサタンへの祈願と同時に神への祈願が同時に存在すると言ったように、これら倫理性はワイルドの心の奥底に潜むもう一つの傾向であったと解釈出来るだろう。一般に、ポーの『ウィリアム・ウイロン』、スティーヴンソンの『ジーキル博士とハイド氏』、ドストエフスキーの『二重人格』などを始めとして、二重人格小説は相対立する性格、傾向を持った二人の人物が登場するが、この時の作家の心の状態について Rogers は次のように言っている。

When an author portrays a protagonist as seeing his double, it is not simply a device or gimmick calculated to arouse the reader's interest by virtue of the strangeness of the episode but is, in fact, a result of his sense of the division to which the human mind in conflict with itself is susceptible.³¹

今、ワイルドの場合、ヘンリーと人間ドリアンのヘドニストぶりを描く事に心傾き、力を入れているのであって、それほど‘葛藤’状態にあったとは考えられないけれども、ワイルドの心には意外にも倫理性が潜んでいる事は他の著作からも発見出来る事実である。それ故、自分のあこがれとするヘドニズムの世界を描いているにもかかわらず、無意識のうちに倫理性が出てしまって、結末はドリアンの自殺で終る事になり、モラリスト、バジルが最後に勝利したような形になってしまった。このアイロニーが気になるのか、「それはモラルを持った小説である。……それはこの本の唯一の欠点である³²」と述べる時、そのつもりもないのに、はからずも本心を出してしまった時のように、彼は多分に自嘲的である。

この小説の最後のパラグラフは次のようになっている。

When they entered they found, hanging upon the wall, a splendid portrait of their master as they had last seen him, in all the wonder of his exquisite youth and beauty. Lying on the floor was a dead man, in evening dress, with a knife in his heart. He was withered, wrinkled, and loathsome of visage. It was not till they had examined the rings that they recognized who it was.

(第20章) (下線は筆者)

もし下線部がなくて、ただドリアンがナイフを胸に刺して倒れていただけの描写であったなら、今述べたように倫理性をもたせた結末となったであろうが、実はそうではない。即ち、この場になって倫理的自己を押しつけて、例の芸術家の自己が現われて来て、十分とは思われなくても下線部のような細工を施してしまったのである。 “It is not for moral

reasons that Wilde lets Dorian perish, but *ex necessitate rei*: Dorian cannot end otherwise.”³³ と Ojala が述べているように、単に道徳的理由のみでこの結末は説明出来ないだろう。ドリアンは美と若さの仮面をかぶって、人々の目を魅了し続けているが、たえず脅やかしているの

は soul を象徴する醜い画像である。そこで善行によって醜さをなくそうとした。しかし彼が善行として田舎娘にした行為は、美しくなるどころか、よけいに画像を醜悪にしてしまったのである。ドリアン自身は確かに善行をしたと思った、しかし実際にはそれは真の善行ではなかったのだ。愛する田舎娘と駆落ちするはずであったドリアンは、突然その計画をやめにした。と言うのは、「その娘を始めて会った時と同じ花のような状態のままにしておこうと決心した」（第19章）からであった。これをドリアンは善行と思った、が実はヘンリーが言うように、この行為は「新奇な感覚を求めようとする欲求」（第20章）であったのである。彼は自分は一体何なのか、何をしたのかよくわからないであって、アイデンティティを失いかけている。自己の確認はあの肖像画を見る事によってのみ可能なのである。ここに至って、ドリアンは仮面を脱ぎ捨てて、実体としての soul と結びつく事は出来るのであろうか。「自白？ それは僕が自白すると言う事を意味しているのか？ 自首して行って、死刑になるという意味なのか？ 彼は笑った。こんな考えは馬鹿げている。それに自白したとしても、一体誰が僕のことを信用するのだ。……彼は気が狂ったとしか世間は言わぬだろう。」（第20章）即ちドリアンは仮面をとる事さえも許されない。彼の奇妙な噂を耳にした人も、彼の顔を見たときたんに疑惑はとんでしまう。親しいヘンリーでさえ、ドリアンが人殺しをし、soul が墮落している事を知らない。ドリアンの美の body は彼にとっては仮面であるが、人々はそれを実体と思っている。虚構が他の人から実体ととられている限り、自白が不可能であるのは明白である。これは虚構の人生をおくつて来たものの悲劇であろうか。仮面がとれない以上、かぶり続けるより他なく、虚構の人生をさらに歩まんとして、ドリアンは、その生活の唯一の脅迫者、画像を消しにかかるのである。他者と思っていた画像は、自分の soul であり、胸であり、そしてその結果はドリアンの死であった。およそ虚構と言うのは、実体があって始めて成立する世界である。それ故実体を抹殺す

る事は虚構自体の自滅を意味するのである。ドリアンの死は、虚構生活のこの盲点を知らなかったが為の結果である。床に倒れていたのは醜悪な、年老いたドリアンだったのに対して、画像の人物は美と若さに輝く青年ドリアンに変わっていた。これは生ける芸術品の敗北と静的な芸術品の勝利を意味する。おそらくドリアンの肖像画は永遠に芸術品としてとどまるであろう。

今述べて来たように、この小説はワイルドの芸術・人生理論を中心として、反道徳性と倫理性（後者は弱いけれども）が交錯しているが、これはこの作品を書く彼の態度が徹底・一貫していないからであろうか。それよりも、この作品のあいまい性は作者の心を反映している、即ち、極端から極端にとゆれ動く、不安定な自己をあらわしているように思えてならない。美と若さのマスクを付けた body ドリアンとヘンリーに代表される反道徳の世界と、墮落した soul を示す画像ドリアンとバジルに代表される倫理性の世界は、ワイルドの理想我又は仮構の自己 (false self) と、内的自己又は真の自己 (true self) とを反映していると言ってよいだろう。この小説に多くの評家は、投獄事件を始めとして、ワイルドの自身の運命を読みとる。それは、ドリアンのように、虚構と実体を分裂させたままでの、長きに渡る虚構的芸術的生活による悲劇以外の何であろうか。

註

- 1 *Complete Works of Oscar Wilde* (London and Glasgow, 1967), pp. 979, 991.
- 2 *Ibid.*, p. 1020.
- 3 *Oscar Wilde: The Critical Heritage*, ed. Karl Beckson (London, 1970), p. 72.
- 4 *Ibid.*, p. 68.

- 5 *Ibid.*, p. 70.
- 6 *Ibid.*, p. 75.
- 7 *The Letters of Oscar Wilde*, ed. Rupert Hart-Davis (London, 1962), p. 270.
- 8 *Ibid.*, p. 257.
- 9 *Ibid.*, p. 266.
- 10 *Ibid.*, p. 257.
- 11 *Ibid.*, p. 259.
- 12 *Ibid.*, pp. 263—264.
- 13 *Ibid.*, p. 266.
- 14 *Ibid.*, p. 259.
- 15 *Loc. cit.*
- 16 『ボードレール全集』第2巻, 矢内原伊作訳 (人文書院, 1969), p. 247.
- 17 *Complete Works of Oscar Wilde*, p. 1003.
- 18 *Ibid.*, p. 1007.
- 19 *Ibid.*, p. 1008.
- 20 *The Letters of Oscar Wilde*, p. 913.
- 21 Arthur H. Nethercot, "Oscar Wilde and the Devil's Advocate," *PMLA*, LIX (Sept. 1944), p. 843.
- 22 Epifanio San Juan, Jr., *The Art of Oscar Wilde* (Princeton, 1967), p. 51.
- 23 『アンドレ・ジイド全集』第6巻, 鈴木健郎訳 (角川書店, 1958), p. 137
- 24 *The Letters of Oscar Wilde*, p. 257.
- 25 *Ibid.*, p. 352.
- 26 *Complete Works of Oscar Wilde*, p. 995.

- 27 "Phrases and Philosophies for the Use of the Youth," *ibid.*, p.1205.
- 28 *The Letters of Oscar Wilde*, p. 352.
- 29 *Complete Works of Oscar Wilde*, p. 912.
- 30 *Ibid.*, p. 934.
- 31 Robert Rogers, *A Psychoanalytic Study of the Double in Literature* (Detroit, 1970), p. 29.
- 32 *The Letters of Oscar Wilde*, p. 259.
- 33 Aatos Ojala, *Aestheticism and Oscar Wilde*, Part I (Helsinki, 1954), p. 213.